

特集 ● 考える力は声の文化から

いうかけ声では本好きにはならない。その前に、大人の声で語つてあげるということが大切だということですね。

ところで、ある地方の保育園で園長先生が「あのは新卒です。子どもたちに何も語つてあげないんです」という話を聞いたことがあります。

松居 そういう人いっぱいいますよ。

編集 困ったもんだというか、普通だと語りたくなるんじやないかと思うのですが。

松居 そうではない。語りたなるとすることは、よほど聞く体験をした人です。それが昔話の語り手です。

読むということは、口から出る声の文化ですから、文字の文化を一端自分の中に取り込んで、口で語るわけです。文字の文化を声の文化にしていくということです。それによって、子どもたちは声の文化を享受していくのです。何でもないことなんです。

私は昔話を語れません。みんな読んでやりました。ですから、「読む」「語る」

は、声の文化をもう一度復活させるということだと思います。

たくさん語ることのできる人は、たく

さん聞いた体験のある人です。私は昔話を語つてもらったことがありませんから、語れない。ところが、昔話の語りを聞いたことのある人は、上手下手はともかく、

何か語ります。語るということは、聞く

という体験がないと語れないので。だから、声の文化の体験の乏しい今の保育者が語れないのは当たり前です。

編集 なるほど。子どもにとっては、ものがたる人の生の声を聞けるという環境づくりが大切ですね。しかし、テレビをはじめとする電子音が飛び交い、それを妨げる世の中になっています。

幼い子どもを持つ親や幼児教育現場の先生方が、子どもの育ちのあるべき環境について真剣に考える時期にきているとされていますが。

松居 一〇月二八日の毎日新聞の社説に「育ちの環境の再生目指せ」と題し、そのことが出ていました。

【毎日新聞一〇月二八日 社説
「子ども論 情報化社会」より】

17歳の少年によるバスマジックや

主婦殺害など、衝撃的な少年事件の記憶が生々しかった今年6月、毎日新聞主催のシンポジウムにパネリストとして参加した東京の児童自立支援施設（旧教護院）指導員・前田信

一さんは、こんな話をした。

「子供たちが社会の中で育ち切れていない。育ち切れていないから自分が語れないのは当たり前です。

「非行」「不良行為」を繰り返す子供たちと、日々向き合っている現場の実感なのだろう。

なぜ育ち切れていないのか。現代の日本において、子供が成長するのに欠かせない環境が失われていることが大きいと思う。子供が子供として過ごすべき時間と場が奪われているのではないかと思うのである。

「本が死ぬところ、暴力が生まれる」（パリー・サンダース著、新曜社）という刺激的な本がある。

人間を人間たらしめるのは言葉であり、人間は読み書き（識字）能力をみがいて、「自己」をつくり上げる。人間は読み書き（識字）能力をもつて、人間にとって大切なものに目をふさぎたともいえる。

育ちの環境を再生する努力、遊びや体験の機会・時間を意識的に作り出す努力が、今求められている。

【毎日新聞社提供】

てきた。ところが、テレビやパソコンなどの電子機器が識字の道を妨害して、考える力を奪い、「自己」が崩壊しつつあると指摘する。もう一度識字の基礎を築くのは口承文化であり、乳幼児期に母親の息、声を経験する)ことが重要、とも強調する。

乳児期の語りかけ、対話的重要性は多くの人の言つところだが、今、何かと忙しい父母は、乳幼児期の我が子と、十分接しきれていないのでないか。働く母親は、ゆつたりと話しかける時間がなかなかとれない。まして父親は、仕事に追われて、ろくろく子供の顔も見られない。事業主婦の場合も含め、母親にばかり負担がかかる構造だ。孤立感、不安感が増幅するのも無理はない。

この後遺症は意外に大きいのかもしれない。経済保障を厚くし、育児

共にいて読んであげてこそ
気持ちが通い合う

しかし現代は、育ちには欠かせない、遊びの環境、要件が失われつづきである。「テレビゲームに興じる子供は断じて遊んでいるとはいえない。自分で条件を規定しコントロールする」という、遊びに必要な決定的要素が欠けている」（『本が……』）

背景には都市化、核家族化、少子化、情報化など社会構造の変化があるが、大きいのは、肥大した学校文化だろう。戦後日本は、子供を学校の成績だけで評価する風潮が強すぎた。自分の試験にこだわるあまり、遊びはもとより、じつくりと本を読